

令和3年度 霞ヶ浦学講座第12講入門編「霞ヶ浦× ESD for SDGs」実施報告案

実施日時：令和3年3月9日（火）～3月22日（月） オンライン動画視聴

講師：小川達己（霞ヶ浦環境科学センター）

視聴申込者数：19名

講演：「霞ヶ浦× ESD for SDGs」概要

環境問題や霞ヶ浦の富栄養化といった課題を解決するには、環境負荷を削減するための法令・しくみ、技術、教育・学習・啓発などの大きく3つが重要になってきます。

【環境問題の文脈】

日本では、1950年代後半から1960年代にはいわゆる四大公害問題が発生しました。高度経済成長とともに公害問題が社会問題となり、公害対策基本法などの法律が整備されてきました。規制、対策技術などにより問題は改善されてきましたが、その一方でライフスタイルの変化に伴いごみ問題など「都市・生活型公害」といわれるものが顕在化してきました。そして経済活動のグローバル化と関連しますが80年代以降オゾン層破壊、地球温暖化、森林破壊など地球環境問題も顕在化してきました。

世界的には、この半世紀をみると国連人間環境会議(1972年)、国連環境開発会議(地球サミット1992年)、国連持続可能な環境会議(リオ+20、2012年)などで世界の国々が一同に介し、環境問題、資源、環境と経済などについて議論を交わしてきました。この世界の様々な動きの中を見るうえで、持続可能な開発の定義「将来の世代のニーズ(欲求)を満たす能力を損なうことなく、現在の世代の欲求も満足させるような開発」(ブルントラント報告、1987年)は国際会議に大きな視座を与えているといわれています。

また、地球サミット後日本では、環境基本法が制定され、環境基本計画が定められました。環境基本計画は多くの県、市町村で策定されています。

霞ヶ浦では、1960年代後半頃より富栄養化による水質の悪化が顕著となり、茨城県は「富栄養化防止条例」(その後、「霞ヶ浦水質保全条例」に全面改正)を制定し、また「湖沼水質保全特別法」に則り、「霞ヶ浦に係る湖沼水質保全計画」を策定し計画的に水質保全に取り組んでいます。平成30年には本県で第17回世界湖沼会議が開催されました。世界湖沼会議で発信された霞ヶ浦宣言では「生態系サービスを次世代に引き継ぐこと」とされ、これは「持続可能な開発」と共通する概念になります。

【SDGsの文脈】

持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals 以下SDGs)は2015年国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2016年から2030年までの国際目標になります。17の目標、169のターゲットがあります。「普遍性」、「包摂性」、「参画性」、「統合性」、「透明性」などの特徴があります。目標は貧困、飢餓、衛生などの問題から、いわゆる環境問題、まちづくり、経済成長、ジェンダー、働き方など経済、社会、環境と多くの分野を網羅しているといえます。

日本政府は、SDGs推進本部を内閣に設置し、「SDGs実施指針」策定、ステークホルダーミーティング、アクションプランを作成しSDGsの達成に向け取り組んでいます。水問題とのSDGsの関連をみますと、目標6「安全なトイレを世界中に」、目標14「海の豊かさを守ろう」、目標15「陸の豊かさを守ろう」などで水へのアクセスや衛生面の改善、富栄養化・海洋汚染の防止、生態系(サービス)の保全、持続可能な利用など世界的にも課題となっている事象が取り上げられていると感じます。霞ヶ浦の課題解決にも共通するゴール、ターゲットを掲げていると思います。また、目標4「質の高い教育をみんなに」では、「持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイルなどの持続可能な開発へ

の貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」ことがターゲットとして掲げられています。

【環境教育・環境学習の文脈】

教育・学習という範疇では環境教育・学習的な取り組みは古くから行われていました。環境問題の顕在化に伴い環境教育・環境問題教育といった教育活動が学校教育や社会教育でも広く行われるようになりました。また、「国連 ESD（持続可能な開発のための教育）の 10 年」（2005～2014 年）が実施され、ESD という概念も少しずつですが知られてきています。ここ数年、SDGs も広く知られるようになり、教育現場でも取り組みが始まっています。また国連では、さらに取り組みを促すために国際的な枠組み「持続可能な開発のための教育：SDGs 達成に向けて（ESD for 2030）」が採択されました。そのなかでは、あらゆる段階での質の高い教育の推進、ステークホルダーとの連携が鍵とされています。

【ESD とは】

ESD とは「持続可能な開発のための教育」で、様々な分野の学習活動を統合した概念ととらえることができます。ESD という特別な科目、方法があるわけではありませんが、「持続可能性とは」、「学習方法」「目的」という点でとらえると大きく 2 つの視点が見受けられます。

A 課題の構造に関する概念：「有限」「多様性」「相互性」

課題解決に向けた行動が備えるべき要素に関する概念：「責任制」「連携性」「公平性」

この有限、多様性、相互性は環境教育・学習においても重要な視点とされています。

B 問題解決に必要な能力・態度：「つながりを尊重する態度」「未来像を予想して計画を立てる力」「多面的、総合的に考える力」「進んで参加する態度」など

いわゆるアクティブラーニングの「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」と大きな関連があります。

【霞ヶ浦における環境学習・まとめ】

霞ヶ浦流域では、当センターをはじめとして多くの機関・団体によって水環境教育・環境学習が行われています。富栄養化の進行に伴い行政、市民団体等による水質浄化に向けた取り組みが始まり、啓発活動なども行われてきました。80 年代以降、富栄養化防止条例の制定、湖沼水質保全計画など法令や計画、水質保全対策がさらに整備・推進され、2 度の世界湖沼会議の開催などを契機に浄化に向けた機運も高まり、霞ヶ浦流域では様々な水環境学習が行われ、広がってきています。

今後、さらなる環境学習を推進していくには、ESD for 2030 にもありますように他団体（ステークホルダー）との連携やすべての教育段階（学校教育、社会教育・生涯学習）において質の高い教育が求められます。

流域では観光などに関連して自転車活用（ツーリズム）、ジオツアーなどが活発になりつつあります。これらに環境保全の視点を盛り込んでいくことも重要です。

また霞ヶ浦流域には当センターをはじめ、博物館、水関連施設など学習の場は多くあります。さらに市民活動を支援するしくみも整っています。いかに私たちが生活者、霞ヶ浦流域に住む市民としてこれら資源・しくみを活用しながら環境学習、環境保全活動に取り組んで行くことが重要になります。